

## 発達に違いのある子どもたち 思いを声にする「吃音」

きつおん

1月、学校では3学期が始まり、中学校や高校を受験するお子さんは進路を定めつつ、卒業に向けて様々な準備を始める頃と思います。小学6年生で「中学受験」をすることも、今では珍しいことでは無くなりました。しかし、「吃音」のお子さんが、受験の「面接」や卒業式の「返事」に対し感じる不安や恐怖は、周囲の人には想像がつかないほど強いものであることを、知らない人が多いのではないかと思います。

吃音は、世界のどの国でも約100人に1人の割合で発症します。吃音は、ことばの発達過程で生じるもので、多くは語彙が増える幼児期に、タイムイングよく話し出すことが難しい状況から始まります。ただし、幼児期に始まった吃音は74%が自然治癒をします。

吃音は、年齢が上がると症状も変化していきます。幼児期や低学年では繰り返し返し(さ、さ、さ、さかな)や引き伸ばし(さーさーかな)が目立ち、本人があまり気にせず話していることも多いですが、学年が上がるとともに難発(最初の一言が出ない)、随伴症状(体の動きを伴う)、高学年から思春期にかけては、吃音が出る不安や恐

怖にとらわれ、ことばを言い換える、話すのをやめる、話す場を回避する症状へと進みます。しかし、吃音には調子の波(人によって違う)があり、時々スラスラと話せることもあるので、外見では吃音が治ったかのように見えます。治ったのではなく、本当は重度化していることを、両親でも見抜けな

### 当事者の思い

今回は、数年前に宇土市内の小学校を卒業したAさんが、自分自身の「吃音」に向き合い書いてくれた作文の1節をご紹介します。

私が小中学校生活を含め、一番吃音のことで悩んだ時期は、小6の後半から中1にかけてです。小6の時は卒業式が一番の悩みの種でした。卒業式の練習が始まる前の時期から「卒業式の卒業証書授与のときに、きちんと返事ができるのか」とか「そもそも、あんなに大勢の前で声が出るのか」などずっと考えていました。最初は、どう

やったらあまり緊張せずに返事ができるか、親や吃音の先生と相談し、心の中でリズムをとりながら返事をするという方法や、最初の返事の音を小さく言う方法など色々考えたけど、どうしても卒業式の練習の時間になると、本当にできるのかとか、みんなの前で返事が言えないことを想像すると足がすくんでしまい、結局練習には参加できませんでした。卒業式に出たくないと言っただけではなく、逆にすくなく卒業式に出たいという気持ちの方が強かったです。でも、いざ目の前にすると失敗するのが怖くて、自分にはできないと身に染みるように感じていました。そうやって考えていくうちに、自分の中で不安がいつぱいっぱいになってしまっただけで、こんなに苦しめないといけないのなら、もう出ない方が楽かもしれないと思って、自分は卒業式に出ないと決断しました。そして、卒業式の練習と本番は、会場の2階から見学しました。今でもそのことを思い出すとすごく辛くなります。

定められました。卒業式ではお子さんの状況に応じて「小さな声でもOK」「〇秒(子どもと決めておく)待っても声が出なければそのまま流す」など、合理的配慮の様々な選択肢があるはず。

### 合理的配慮

Aさんのご家族は、学校に合理的配慮を求めましたが、Aさんだけ特別扱いができないと断られたそうです。2016年に「障害者差別解消法」が施行され、「合理的配慮」は法律で



吃音の合理的配慮 / 菊池良和 / 学苑社